生きた証し 遺族の手に

県内初の資格者 同行ルポ

亡くなった人の家を身内に代わって清掃し、遺品を片付ける「遺品整理業」という仕事がある。高齢者の単身世帯が増え、独居死が後を絶たない中、需要は高まる一方だ。昨秋には社団法人「遺品整理士認定協会」（北海道千歳市）も発足。昨年12月、兵庫県内で初めて遺品整理士の資格を取得した屋宜明彦さん(32)が勤める西宮市の廃棄物処理会社「リリーフ」には、関西一円から年間300件近くの依頼が寄せられる。（飯田　憲）

需要高まる遺品整理業

3月中旬、芦屋市内の復興住宅で作業する屋宜さんに同行した。入居していた88歳の独居男性は、年明けに介護施設に移り、その後、息を引き取った。

立ち会った親族は部屋を見わたし「正月に体調を崩して、施設に入った時のままです」とつぶやいた。その横で、作業着姿の屋宜さんら5人が、故人に手を合わせ、作業を始める。

一つ一つ引き出しを開け、写真や印鑑など形見や貴重品になりそうなものは親族に尋ねる。アルバムや書類も1ページずつめくるほどの丁寧さだ。

間取りは2DK。飲みかけのペットボトルなど食料品が雑然と並ぶ中、丁寧に折り畳まれたシャツや下着も。カレンダーには服用薬の量のほか、週に数回利用していたとみられるヘルパーの名前が記してあった。

サイドテーブルの日記は開かれたまま。「一月一日　太陽を見ることができた。おめでとう」。〝最期〟の書き込みだった。だが、遺品を持ち帰るための段ボールは、なかなか埋まらない。「長年疎遠だったんで、残しても意味ないでしょ」と親族。その時、ケースに入った老眼鏡を見つけた。試すと、ぴったり。「親子だと似るんかな…」。保管用の段ボールにそっと入れた。

年明けの日付で止まったカレンダー。亡くなった男性宅で遺品整理をする作業員ら＝芦屋市内（撮影・いずれも笠原次郎）

独居死増加 年300件、生前予約も

5時間ほどで部屋は空っぽに。運び出した段ボールは2トントラック3台分になった。

現場リーダーとして約500件を請け負ってきた屋宜さんだが、やり切れない気持ちになる現場は多い。病死して数カ月後に異臭で気づかれた人もいれば、身寄りがないため生前から予約を入れる人もいる。

それでも、屋宜さんはこの仕事に誇りを持つ。「遺品は人生そのもの。故人の生きた証しを伝えられるよう、遺族のお手伝いをしたい」

昔の写真を作業員とともに整理する親族。40年以上前のものも

基準、法律が未整備

昨秋団体発足 トラブル多発 健全化急務

2010年の国勢調査では65歳以上の1人暮らしは全国で約501万8千人。兵庫でも約23万9千人に上る。一方で核家族化も進み、遺品整理の需要は近年、増え続けている。ただ、業界の足並みはそろわず、廃棄物処理業者や運送業者などが担う一方、明確な基準や法律がないことから、不法投棄や高額請求など、遺族とのトラブルになるケースも少なくない。

こうした中、昨年9月に発足した社団法人「遺品整理士認定協会」は、廃棄物処理法などの関連法や心構えなどを身につけると認定される民間資格を創設。養成講座の受講者は千人を超え、資格取得者は今年3月末現在、約80人となっている。

同協会によると、東日本大震災後、被災地の仮設住宅での独居死も増え、不適切な処理をする業者も参入しているという。協会担当者は「需要が増えると、悪徳業者も出てくる。業界の健全化は、喫緊の課題」と話す。